

絶対ではない道具としてのマンガ

- 漫画家は自分が構成した内容に絶対の責任を持たない（持てない）
略画化した時点で正確とは言い切れない、説明も簡素化したら充分と言えない
- マンガは多数の受信者に広いニュアンスとターゲットで伝達するもの
（完璧には伝わらないことを承知で表現しているとも言える）
- 用いる側がマンガの有用性を過信せず、読者への配慮を尽くす場合にのみ、その有用性は発揮される

機能マンガのはじめの一步

- フラットなキャラクターを配し、ドラマ性を強くしすぎない
 - 説明を重視しすぎるあまりに説明が連続するのを避ける
 - 読者が難なく知識を拾い集められるような構成を工夫すること
-
- 厳密には不正確なツールだが、承知の上で用いるなら有用に転ずる（伝達度60%？）
 - 用いる側に過信がなければ、知識の入り口のツールとして使える
 - 人は全く触れていない知識には簡単に興味を向けない→ベースを作る一助に
 - マンガの性質を熟知し、**どう使うかを決めて目的に添った制作**をすることが重要
 - 必ずマンガに**精通した制作者**（監督者でも良い）を用意すること

マンガをツールとして使う際に留意する点

- 制作者とは別にターゲットの性質を熟知した指揮者が必要
読者が理解できない（かもしれない）ことを想定して表現の是非を判断
- 指揮者の指示に応えられるだけの技量のある表現者
- 機能（実用）マンガ作品を集め、学ぶ（個々のレベル差を理解する）ことも重要
- 発注する側の認識、指揮者の認識、表現者の認識をできるだけ一致させる（打ち合わせに時間をかける）問題は機能マンガに特化した実作者・表現者がまだ少ないこと
- 結果としての伝達度を上げる努力（漠然とした送信を可能な限り排除）
文言の細部、画像のニュアンス、多方向のステークホルダーからの表現検討

マンガの利用は難しいが 手放すには惜しい有用性

- 伝達度85%が見込める完成度に到達できれば、確実に結果が残せる（影響が出る）
- マンガを有用に使うには制作する前から、レベルの高い内容準備が必要
- 表現者には技量を求める仕事になるので、「安く簡単に」と考えない
 - 「やってみる」程度では、実は結果が残せるものが作れない
- 数多く存在する実用マンガのレベルは、現在のところ様々で玉石混交
- 表現者には技量上げる場として、企画側には高い企画力と指揮力を持って参画してほしい→それだけの値打ちがあるツール

LLブックとしてマンガの利用を考えるとき

- 研究会やプロジェクトチームなどを設けて、日ごろから準備する
- 年に1冊でも生み出すことが出来始めたら、道が敷かれていく
- 最初は小さくても結果を常に求めることが必要
- 大事なのは結果を残すことではなく、結果を検証し、次回のステップアップに繋ぐこと
- マンガ言語の基礎研究が大切→マンガをどう読みやすく作るかは実作者だけが考えることではない（丸投げせず一緒に悩んでください）
- 実作者だけではなくマンガ言語を解する研究者も必要

絶対ではない道具としてのマンガ

- 漫画家は自分が構成した内容に絶対の責任を持たない（持てない）
略画化した時点で正確とは言い切れない、説明も簡素化したら充分と言えない
- 送信（描き手）と受信（読者）の間に確信的な齟齬がある（あることを知っている）
内容の決定は送信者に任されている（前もって相談はない）
- マンガは多数の受信者に広いニュアンスとターゲットで伝達するもの
（完璧には伝わらないことを承知で表現しているとも言える）
- 用いる側がマンガの有用性を過信せず、読者への配慮を尽くす場合にのみ、その有用性は発揮される

機能マンガの実例 故郷マンガ『月の影』

- 京都精華大学での教え子2人による
- 故郷（関川村）に残る伝説を故郷紹介のためにマンガ化
- 監督者として京都精華大教授と竹宮の二人がついた
- 現地への取材＝地域の広さや暮らし方を知るため
- その後はネーム（マンガの設計図）や下描きをインターネットでストレージにアップし、それぞれがダウンロードして確認
- 依頼してから約半年の期間で制作



脳卒中啓発マンガ ポスター

- 納所中実験的にマンガが用いられた例
- どれくらい伝わったかを小学生を対象に検証した
- 80～90%くらいの伝達力
- 幅があるのは内容の伝達確度を100%までは確認できないから



●ネーム修正指示

先生に修正を書き込んでいただいたものです。



A案



B案

●下絵 1 ←



修正を元に下絵を作成しました。 ←

●下絵 2

真ん中の「Arm」のコマの絵に大幅な修正が入り、書き換えています。



●カラー←

この時、竹宮先生から←

一番上の脳卒中の字を他のと同じにして、黄色で破裂の吹き出しをつけるよう指示をいただきました。←

また、先方からいただいた訂正は↓←

- ・右上の「脳卒中」のフォントを大きくする←
- ・Armの両手を挙げている絵の、左手のひらを天井向きにする←
- ・「T：発症時間」「発症時間を確認して」となっていますが、正しくは「発症時刻」 ←

←

絶対ではない道具を有功に使うには

- 内容に責任を持つ作画、そしてセリフ（言葉）に細心の注意を→誤解を極力避け、オーバーすぎない表現にとどめる
- クライアントが常に制作に関わり（監督者）、問題点を払拭していく役目にまわること
- 補助的な情報を文章や図版で十二分に補填して、不足がないようにする
- 一般のマンガ制作よりも時間をかけ、急がないこと（確実性をなるべく多く確保するために）
- 意志的に作ることを心がける・・・労力と資金をムダにしないように！

ご静聴ありがとうございました！

マンガが使い方次第で使える道具になるということを忘れないでくださいね！